

平成 26 年 7 月 12 日(土) 14:00~15:30  
富山国際会議場 多目的会議室 201・202

## うたわれた富山湾 — 『万葉集』から『おくのほそ道』まで—

講師 高岡市万葉歴史館 学芸課長  
新谷 秀夫 氏

日本海学の講座ということで、みなさんの生活の一部になっている富山湾が和歌のなかでどのようにうたわれてきたのか、歴史をたどっていこうと思います。副題については、当初、『万葉集』から『おくのほそ道』へと、江戸時代に松尾芭蕉がやってきたあたりまでお話をしていると思っていましたが、あえて逆転させてお話を進めます。『おくのほそ道』で詠まれている富山湾について、『万葉集』まで遡ってみることでポイントを絞り、話を進めていこうと思います。



### 一 はじめに —松尾芭蕉『おくのほそ道』に見える歌枕—

くろべ<sup>しじふはちがせ</sup>四十八ヶ瀬とかや、数<sup>かず</sup>しらぬ<sup>かわ</sup>川をわたりて、那古<sup>なご</sup>と云浦<sup>いづ</sup>に出<sup>いづ</sup>。  
黒部川は四十八ヶ瀬というが、その名のとおりに数もわからぬほど多くの川を渡り、那古という浦に出た。

担籠<sup>たご</sup>の藤波<sup>ふぢなみ</sup>は、春<sup>とも</sup>ならず共<sup>とも</sup>、初秋<sup>はつあき</sup>のあはれといふべきものと、人<sup>たづぬ</sup>に尋<sup>たづぬ</sup>れば、  
担籠の藤は、花の季節の春でなくても、初秋の趣も一見の価値はあるはずだと、人に道を尋ねると、

「是<sup>これ</sup>より五里<sup>ごりいそ</sup>磯<sup>いそ</sup>づたひして、むかふの山陰<sup>やまかげ</sup>に入<sup>いり</sup>、蟹<sup>あま</sup>の芦<sup>あし</sup>ぶき  
「ここから五里ばかり海岸沿いに歩いて、それから向こうの山陰に入った所だが、漁夫の粗末な家が

かすかなれば、一夜<sup>ひとよ</sup>の宿<sup>やど</sup>かすものあるまじ」と云<sup>い</sup>おどされて、  
少々あるだけですから、一夜の宿を貸してくれるものもありますまい」とおどかさされ、

か<sup>くに</sup>の国<sup>くに</sup>に入<sup>いる</sup>。  
(担籠はあきらめて)加賀の国に歩みを進めた。

わせの香<sup>か</sup>や分<sup>わけ</sup>入<sup>いる</sup>右<sup>みぎ</sup>は有<sup>あり</sup>そ海<sup>うみ</sup>

卵<sup>う</sup>の花山<sup>はなやま</sup>、くりからが谷<sup>や</sup>をこえて、金沢<sup>なかに</sup>は七月中<sup>なかに</sup>の五日<sup>いつかなり</sup>也。  
卵の花山や俱利伽羅峠を越えて、金沢についたのは七月十五日のことであった。

「くろべ四十八ヶ瀬とかや、数しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出」という文章から、越中の部分が始まります。黒部の数もわからぬほどたくさんの流れ、それを越えて那古という浦に出たと。そこで「担籠の藤波」、藤の花は春の花ですが、春じゃなくても秋でも趣があるだろうと思って、人に「担籠の藤波」を見に行きたいのですが、と道を尋ねます。多分その質問された人が指をさしながら、「ここから、五里、磯づたいにずっと歩いて行って、向こうに見える山の向こう側です」と説明したのでしょう。ここの

山というのは、二上山をさしています。「那古」は現在の射水市、旧新湊あたりの地名ですから、新湊辺りに来て人に道を尋ねると、二上山の向こうの氷見を指さして答えたというわけです。何と答えたかという「漁師の粗末な家が少々あるだけですから、一晚の宿も貸してくれる者もない」と「那古」の人に脅かされたので、仕方なく加賀の国に入ったと書いています。その加賀の国へ向かう途中、《わせの香や分入右は有そ海》という句を残し、7月15日に金沢に入ったという文章で、富山県、当時でいう越中は終わります。非常に短い文章なのですが、富山県内で1つだけ句を残してくれています。

この文章の中で青い色の字、これがいわゆる歌枕と言われている場所です。ピンク色の字は同じように地名なのですが、この2つに関しては歌枕として扱われていません。たったこれだけの短い文章の中に4つも歌枕が出てくる。これは意味があるのですが、その前に、この芭蕉の文章が、あくまでもフィクションであるというのを、次にあげる弟子の日記で見てください。

『おくのほそ道』の旅は松尾芭蕉1人で行ったのではなく、河合曾良（かわいそら）という弟子を連れていました。この弟子が実に几帳面な人で、非常に細かく日記を書いていました。『おくのほそ道』で「くろべ四十八ヶ瀬」から始まる文章の部分はどうなっているか、つまり越中の部分です。

十四日 快晴。暑甚シ。富山カ、ラズシテ（滑川一里程来、渡テトヤマへ別）、三リ、  
東石瀬野（渡シ有。大川）四り半、ハウ生子（渡有。甚大川也。半里計）。氷見へ  
ゆかんとほつして ゆかす  
欲行、不往。高岡へ出ル。ニリ也。ナゴ・二上山・イハセノ等ヲ見ル。  
高岡ニ申ノ上刻着テ宿。翁、けしきすくれず気色不勝。暑極テ甚。小（不明）同然。  
十五日 快晴。高岡ヲ立。埴生八幡ヲ拝ス。源氏山、卵ノ花山也。クリカラヲ  
見テ、未ノ中刻、金沢ニ着。

「富山カ、ラズシテ、三リ、東石瀬野」、富山の方向へ行かずに、三里進んで東石瀬野へ向かったという間の、かつこの中の小さい字は、曾良の注です。「滑川一里程来、渡テトヤマへ別」、つまり滑川から一里ほど進むと川があり、そこから富山と岩瀬に別れるのだとあります。曾良と芭蕉は、滑川を出発して、現在の富山市中心部に向かわずに海沿いに岩瀬へと進んだ。「渡シ有。大川」、これは神通川を渡ったという意味ですが、その後、曾良は「ハウ生子」と書いていますが、放生津（ほうじょうづ）という地名を残しています。さらに「渡有。甚大川也。半里計」、つまり幅が2キロぐらいの大きな川を渡って、「氷見へ欲行、不往。高岡へ出ル」と書いています。氷見へ行こうとして、道を尋ねたら、そんなところ人が行く所じゃないと言われたので、加賀へ入った、と芭蕉は言っていますが、実際には高岡で1泊していることがわかります。「ニリ也」、放生津から高岡は約2里、これは現在の8キロ程ですので、正しい距離感です。

「ナゴ・二上山・イハセノ等ヲ見ル」と書かれている3つも歌枕と言われるものです。これらの3つの歌枕を見て、「高岡ニ申ノ上刻着テ宿」ということで、芭蕉が滑川を前の日の朝出発して、富山市でも海沿いに岩瀬、放生津と進んで、そのまま海伝いに氷見へ行こうとしたのだけでも行かずに高岡へ向かい、夜に着いて1晩泊まったと

ということがわかります。その間に「ナゴ・二上山・イハセノ」という3つの歌枕を見たという。松尾芭蕉の『おくのほそ道』には「那古」しか出てこないのですが、弟子のほうは「二上山、イハセノ」と2つ足しています。その後、「快晴。高岡ヲ立。埴生八幡ヲ拝ス。源氏山、卯ノ花山也。クリカラヲ見テ、未ノ中刻、金沢ニ着」ということで、翌日金沢へ着いた。これで芭蕉が滑川から海沿いを伝って高岡、そこから倶利伽羅を越えて金沢へ入ったという旅の流れがわかります。

なぜ氷見へ行かんとしたのか、行かんとして行かなかったのか。芭蕉の方は「那古」の人に、人が住まない所だから行かない方がいいと言われたので行かなかったと書いているのですが、弟子は他に理由を書いています、「翁、気色不勝。暑極テ甚」と。つまり芭蕉はこの時に若干顔色が悪く、暑さもひどかった。今風に言うと熱中症にかかって、これ以上長く歩くよりはまず宿を取ろうとして、高岡へ入ったということが、この弟子の日記でわかります。これが『おくのほそ道』の文学としての面白さを追求した所です。ただ芭蕉が「坦籠の藤波」に行きたかったということは事実で、それがかなわずに、やむなく富山を離れて金沢へ行ったということは、弟子の日記からも想像できます。行きたいと思っていたのに行けなかったという訳ですから、芭蕉は「坦籠の藤波」にこだわっていたということは間違いありません。

## 二 『おくのほそ道』に見える歌枕 — 『万葉集』を典拠とする歌枕 —

ここに『おくのほそ道』に出てくる4つの歌枕を挙げています。歌枕というのは古い歌に詠まれた場所で、それが後々有名になっていって、色々な歌にうたわれるようになる名所旧跡なのですが、必ずそのきっかけになる歌というのがすべて説明されています。

### (1) 「那古と云浦」

波立てば 奈呉の浦廻に 寄る貝の  
間なき恋にそ 年は経にける (田辺福麻呂)  
波が立つたびに奈呉の浦あたりに寄ってくる貝のように、絶え間なく恋しているうちに、年月が経ってしまいました。

あゆをいたみ 奈呉の浦廻に 寄する波  
いや千重しきに 恋ひわたるかも (大伴家持)  
あゆの風が激しく吹いているので奈呉の浦あたりに寄せる波のように、ますますしきりに恋しく思いつづけています。

「那古と云浦」つまり「奈呉の浦」については、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけてたくさん出版された歌枕に関係する著述のほとんどが、この2首を挙げています。つまり『万葉集』に出てくるこの2つの歌が根拠になって「奈呉の浦」は歌枕だというふうに規定されているわけです。

### (2) 「坦籠の藤波」

[天平勝宝2年(750年)4月]十二日に、布施の水海に遊覧するに、  
多祜の湾に船泊し、藤の花を望み見て、各懐を述べて作る歌四首  
藤波の 影なす海の 底清み

しづ いし たま あ み  
沈く石をも 玉とそ我が見る (大伴家持)

藤の花が影を映している水海の水底までが清く澄んでいるので、沈んでいる石も真珠だとわたしは見てしまう。

た こ うら そ こ ふち なみ  
多祜の浦の 底きへにほふ 藤波を

かざして行かむ 見ぬ人のため (内蔵繩麻呂)

多胡の浦の水底まで照り輝くほどの美しい藤の花を、髪に挿して行こう、まだ見ない人のために。

い さ さ か に おち こ  
いささかに 思ひて来しを

た こ うら さ ふち み ひ と よ へ く め の ひ ろ な わ  
多祜の浦に 咲ける藤見て 一夜経ぬべし (久米広縄)

ほんのちょっとと思ってきたのだが、多胡の浦に咲いている藤を見たら、一夜を過ごしてしまいそうだ。

ふち なみ か り ほ つく うら み ひ と し  
藤波を 仮廬に造り 浦廻する 人とは知らに

あ ま く め の つ く ま ろ  
海人とか見らむ (久米継麻呂)

藤の花で仮小屋をふいて浦めぐりをする人とは知らずに、海人だと見られているのではなからうか。

天平勝宝2年の4月12日に布勢の水海という場所に出かけた時に、多祜の浦に船を泊めて、藤の花を見て4人が詠んだ歌、この4首の内の2つ目の歌が「坦籠の藤波」の典拠とされます。すべての本が共通して挙げるのはこの歌だけなので、この歌こそが典拠ということになります。ただ、「布勢の水海の藤」というのは、その前の家持が作った歌の方が有名です。この歌こそが「布勢の水海」という湖を代表する歌と思うのですが、「多祜」という地名が出てきません。それに対して2首目は、多祜の浦の水底まで照り輝くほど美しい藤の花、と言っているのです、こちらの方が歌枕の根拠としてはふさわしいということになり、この歌が歌枕の典拠とされています。ただ、歌の前の説明文、題詞には「多祜」の浦に船を泊めて藤の花を見たと書いてあり、4首とも藤の花を詠んでいます。ですからこの4首が「坦籠の藤波」の典拠とされる歌というふうにも規定できます。これもまた「那古の浦」と同じく『万葉集』が元になってできた歌枕です。

### (3) 「卯の花山」

…… おほきみ みことかしこ を くに ことと も わかくさ あゆひ たづく  
大君の 命恐み 食す国の 事取り持ちて 若草の 足結手作り  
むらとり あさ た いな おく あれ かな たび ゆ きみ こ おも  
群鳥の 朝立ち去ば 後れたる 我や悲しき 旅に行く 君かも恋ひむ 思  
ふそら やす なげ かくを とど み わた 見渡せば 卯の花山の  
ほととぎす 音のみし泣かゆ 朝霧の 乱るる心 言に出でて 言はばゆゆ  
しみ と な み や ま た む け か み ぬ さ ま つ あ こ の おおともいけぬし  
しみ 礪波山 手向の神に 幣奉り 我が乞ひ禱まく …… (大伴池主)

……大君の仰せを恐れ謹んで、ご領土の公務を帯びて、(わかくさの) 足ごしらえをして、(むらとりの) 朝に出発して行かれたならば、あとに残るわたしはどんなに悲しいことでしょう。旅行くあなたもどんなにか恋しく思われるでしょう。思う心が安らかではないので、ため息をこらえることもできず、見わたすと、向こうに見える卯の花の咲く山で鳴くほととぎすのように、声をあげて泣けてきます。(あさぎりの) 乱れる心を口に出して言うのは不吉なので、礪波山の峠の神に、幣を捧げて、わたしはお祈りします。……

「卯の花山」も『万葉集』から生まれた歌枕です。長い歌なのですが「見渡せば卯の花山のほととぎす音のみし泣かゆ」と出てきます。見渡すと向こうに見える卯の花の咲く山で鳴くほととぎすのように、と続いているのですが、この歌の「卯の花山」は決して固有名詞、地名ではありません。単純に卯の花が咲いている山という普通名詞なのです。しかしその後「礪波山手向の神に幣奉り」と、礪波の山、現在の俱利伽羅峠の地名が続いています。それで「卯の花山」は礪波山、現在の俱利伽羅の近辺のどこ



かにかあったと勝手に決めてしまわれるわけです。

「卯の花山」は後の人が勝手に作り出した歌枕なのですが、それは固定してしまします。砺波にある山だと規定されて歌枕になったために、江戸時代の地図には、実際に「卯の花山」が書いてあります。新湊博物館にある石黒信由の越中の地図にも、ちょうど俱利伽羅の下の方に「卯の花山」と書いてあるものがあります。現代の国土地理院の地図には書いてありませんが、そういうふうに、《嘘から出た誠》状態で歌枕になったのが、この「卯の花山」というものなのです。

#### (4) 「有そ海」

かからむと かねて知りせば  
越こしの海うみの 荒磯ありその波なみも 見みせましものを (大伴家持)

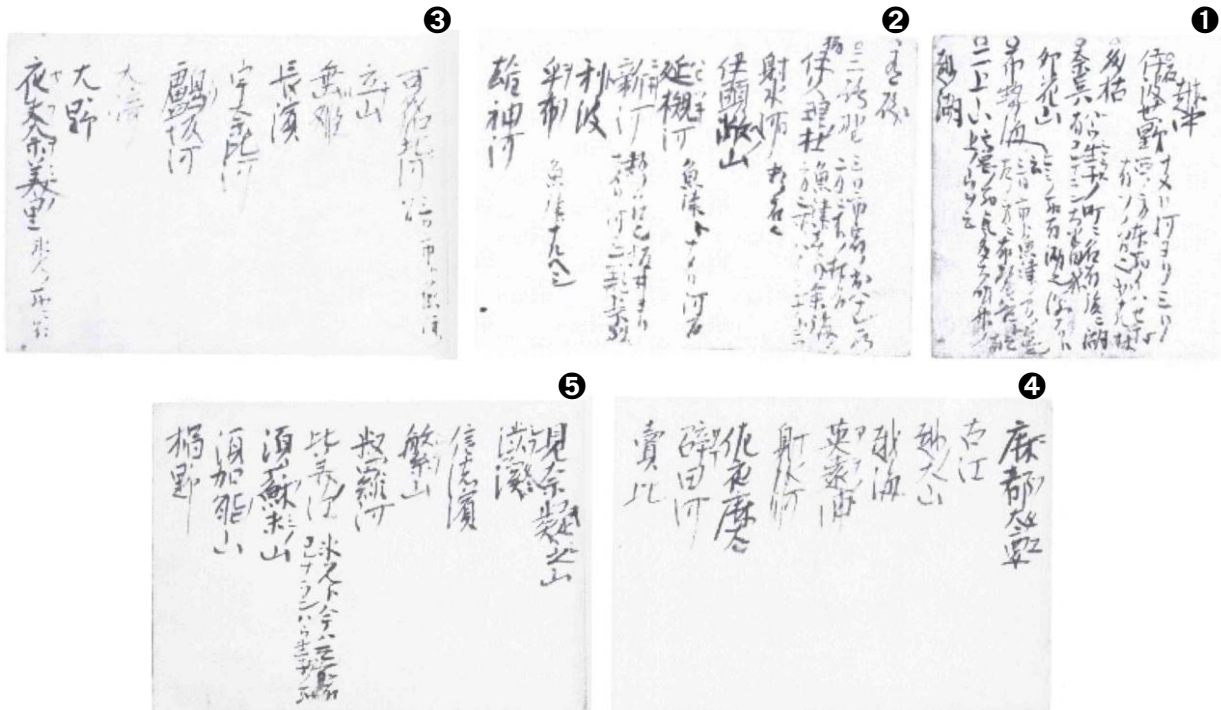
こうなると前々から知っていたならば、この越の海の荒磯にうち寄せる波でも見せてやるのだったのに。

同じように、実際には存在しないのに、あたかもあるように言われて歌枕になったのが、「有磯海」という歌枕です。『万葉集』の中にあるこの歌、家持の弟が死に、その報告が越中に届いた直後に家持が悲しみながら詠んだ歌で、「かからむとかねて知りせば」、こうなることが前もってわかっていたならば、越の海の荒々しい磯も見せてやれたのに、実際にはかなわないのだけれども、もし前もって死ぬとわかっていたならば、弟に越の海の荒磯を見せたかった、という歌の中に出てきます。これを根拠に「ありそみ」が歌枕になったというのですが、家持は「越の海のありそ」とうたっていますが、「越のありその海」とはうたっていません。「ありその海」ではないのです。「ありそ」という言葉は本来、荒々しい磯という意味の普通名詞で、固有名詞、特定の場所を示す言葉ではありません。ではなぜ「越の海の荒磯の波」というこの歌を根拠に「有磯海」が生まれたのでしょうか。

結論を先に言っておきますと、『万葉集』の中に見える「荒磯(ありそ)」という言葉、実は違う漢字を万葉びとたちは使うのですが、この「ありそ」という言葉のよまれ方と、平安時代以降の和歌に見える「ありそみ」が結びつけられてできた歌枕です。「有磯海」は『万葉集』が典拠だと言いながら、決して『万葉集』の中には出てきません。これも「卯の花山」と同じように作り出された枕詞や歌枕なのです。

### 三 『おくのほそ道』に随行した河合曾良の「歌枕覚書」

『おくのほそ道』の旅に同行した弟子の河合曾良は、実はこの後ある大きな大名に仕えて、土地の謂われなどを調べる仕事に就きます。つまり弟子の方は全国各地、それぞれの土地の謂われなどを調べるのにすごく長けた、秀でた人だったので、ある大きな大名がお抱えされたわけです。その弟子が芭蕉に従って日記を書きただけでなく、芭蕉の旅、『おくのほそ道』の旅に出る前、膨大な下調べをしていたのです。



「歌枕覚書」というのは河合曾良が残した日記の一部、そう呼ばれている部分で、実際こういう名前の本ではありません。越中に関する部分がこの5枚の写真になります。1番最初に越中と書いてあり、この5枚目のあとに加賀と書いてあり、この間に越中にあるとされる地名を2つの本を基にして書き出しています。

まず、江戸時代初期の連歌師、里村昌琢が「二十一代集」といわれる、21個の勅撰和歌集（天皇が命令を出して作った和歌集）の中から、名所和歌（地名が出てくる歌）を全部抜き出して、国別に分類した『類字名所和歌集』という本が元和3年（1617年）に出版されています。これはこの後増補や追加がされて幕末まで出版され続け、江戸時代の隠れたベストセラーになります。それともう一つ、石川清民が、『万葉集』の中に出てくる名所和歌を分類して編纂した『檜山拾葉』という本が寛文11年（1671年）に出版されます。河合曾良はこの2つの本を基にそれぞれの国別の歌枕を全部抜き出し、本に出てくる順番の通り並べているのです。2つ目の写真の2行目に「三嶋野」と書いてあり、その次に、「伊久理ノ杜」とあります。その「伊久理ノ杜」の上に「拾」という字があります。つまり、「三嶋野」までが『類字名所和歌集』に出てくる歌枕で、「伊久理ノ杜」から後が『檜山拾葉』に出てくる歌枕というわけです。つまり名著とされる『類字名所和歌集』から引いた後、補うように『檜山拾葉』からも『万葉集』の歌枕を全部引っぱってきて書き出してあり、さらにメモを書き加えています。

例えば1番最初、「伊波世野」というのが出てきて、下に注が書いてあります。その次に「多枯」という地名があって、何も注が入ってなくて、その次に芭蕉が最初に行った場所「奈呉」が出てきます。下の注に「バウ生子ノ町二名有。後ニ湖有、コレナラン。大半、田ニ成」とあります。今は富山新港になっていますが、昔放生津潟というのがありました。ちょうど現在の新湊の町の南側は湖のような形で潟が広がっていた、そのことを言っているのだと思いますが、それが「奈呉」であろうと書いてあります。それか

ら歌枕として有名だった「卯花山」、その次に「布勢海」と書いてあって、下に「ヒミノ西有湖也、瀉ナリト云」と注があります。ただし非常に面白いのは、「三日市ト魚津ノ間ノ辺也。左ノ方ニ、布勢谷ト云有」とも書いています。つまり私たち万葉学者は、「布勢の水海」のことを氷見だと思っているのですが、実際には魚津にも「布勢」という地名があるのです。曾良は2つの説があると、その両方を残してくれているのです。

このような説明は、基にした『類字名所和歌集』、『檜山拾葉』には一切入っていません。単純に「三嶋野」にはこんな歌があります、という歌しか挙げてないので、曾良みずから説明を書き加えたということがわかります。これは富山、当時の越中へ来た時に地元の人たちに聞いた話としか思えないのです。決して江戸にいる人たちは知る由もないような地名の細かい説明ですから、これは曾良が芭蕉と一緒に歩きながら、それぞれ歌枕が実際どういう所にあるのかを細かく調べていたという根拠になります。

今回は越中の部分しかお見せしていませんが、曾良はこれを江戸から離れて東北を巡って、芭蕉と別れる小松までずっと続けています。小松で病気になり一人先に帰るまでの間、このような地名の説明を書き加えています。しかも「伊波世野」、「多枯」、「奈呉」、「布勢海」、「二上山」、「有磯」、「三嶋野」の上には小さく○印をつけているのが、実際に見て回った場所であろうと考えられます。これは滑川から海沿いに行って高岡へ行って、それから金沢へ向かったという行程を考えると、その途中にある場所ばかりですから、それぞれを見て回ったというのが、この「歌枕覚書」からもわかるわけです。ただし、本当の場所を見たかどうかというのは疑わしいものもありますが、一応曾良はこういう形で印を残しています。

このような資料があるおかげで『おくのほそ道』の旅の目的がわかるのです。つまり全国、この場合は東北から北陸にかけてですが、なぜ芭蕉が年を老いて、死ぬか生きるかという年になってからこんな長旅に出たか、それは、古くから歌に詠まれた場所、つまり歌枕というのを実際に見て回ることが一番大きな目的だったわけです。東北でもそうですし、佐渡、新潟でもそうですが、芭蕉が行った所はすべて歌枕と言われている場所なのです。そのなかのすべてではないですが、重要な所で芭蕉は俳句を詠んでいます。これは日本の文学の伝統で、昔から和歌を詠む人たちが大事にしてきた地名、場所で、俳句ではあるけども自分もその末裔にあたる人間であるから、同じ場所で俳句を詠みたいという思いがあったので、要所要所で俳句を詠んでいるわけです。

東北にはたくさん歌枕があるのですが、越中の歌枕だけはすべて『万葉集』にゆかりのものなのです。それ以外の場所には万葉の歌はほとんど残っていないので、芭蕉の旅の最初の頃は全部平安時代以降の和歌で詠まれた場所、特に芭蕉が崇拝する西行の詠んだ場所を順番にめぐっています。そのなかで、なぜか越中だけはすべて『万葉集』です。つまり越中は『万葉集』にしかうたわれていない場所、越中は奈良時代に有名になった後、文学の歴史からは、数百年消えていました。その数百年消えた後、突然復活したのが実はこの松尾芭蕉の時代なのです。つまり越中というのはこの間の文学史上、源平合戦の倶利伽羅ぐらいしかなく、それ以外ほとんど出てこないのです。

#### 四 『万葉集』にうたわれている富山湾

実際に『万葉集』で越中がどのように出てくるのか。『万葉集』にうたわれている富山湾の歌に戻ってみたいと思います。『万葉集』では、越中で詠まれた歌は家持を中心に400という数を数えますが、そのうち海が詠まれた歌はここにあげる歌だけです。むしろ家持は川を詠むのです。なぜかという理由はいろいろ議論されていますが、家持が越中万葉で残した歌の地名、場所は、ほとんど川なのです。ですから、むしろ越中を語るときは川を語っていく方が話はわかりやすいと思うのですが、あえて今回は海にこだわります。

##### (1) 「越の海」

かからむと かねて知りせば  
越の海の 荒磯の波も 見せましものを (大伴家持)

(前述)

越の海の 信濃 浜の名なり の浜を 行き暮らし

長き春日も 忘れて思へや (大伴家持)

越の海の信濃 浜の名である の浜を一日中歩きつづけても余るこんな  
長い春の日でさえ、妻のことを忘れてしまったりするものか。

家持は1番最初「越の海」というのを2回詠みます。1つ目は先ほどの「有磯海」の根拠になった「かからむとかねて知りせば」という歌ですが、もう1つ「越の海の信濃の浜を行き暮らし」という歌があります。本来、「越」というのは北陸全体、つまり越前、越中、越後と全部を指すのですが、家持が「越の海」と言った時は明らかに越中という意味で使っていると思われます。ですから「越の海の荒磯」というのは、つまり越中の海の荒磯、それから「越の海の信濃の浜」というのは、越中にある信濃の浜ということです。その信濃の下には「浜の名なり」と注まで入れています。信濃というと普通考えるのは国の名前です。その信濃という国の名前が越中の浜の名であるということ面白がって注を入れているのです。越中なのに信濃があるということ、少し面白おかしく伝えようということで、「越の海の信濃の浜」というのを詠んでいます。これは越中万葉の中では珍しく所在不明の場所で、一つは魚津の方にあるという説、もう1つは、歌の並びからいうと射水の旧新湊あたりのどこかの浜であるという説があります。実際には今「信濃の浜」という地名は残っていません。ですから具体的にどこかはわからないのですが、「越の海」という越中の海つまり富山湾そのものを2回詠んでいます。

##### (2) 「奈呉の海・浦・江」

「越の海」といった総称、全体を詠んだ歌を除くと、実は富山湾で1番たくさん詠まれたのが、「奈呉」という場所です。現在の射水市の海岸線、旧新湊の辺り、この「奈呉」を一番詠んでいます。「奈呉」という浦、江、海と色々言い方は変わりますが、「奈呉の海」そのものを詠んでいます。「奈呉の海」は主に海人(あま)、鶴(たづ)、波という、この3つとの組み合わせが集中的に表れます。

奈呉の海人の 釣する舟は



いま 心なだなう あへてこで はたのやちしま  
今こそば 舟棚打ちて あへて漕ぎ出め (秦八千島)  
みぎ むつろみ かくおく い つつ さうかい のぞ あるじ うた つく  
右、館の客屋に居つつ蒼海を望み、よりに主人この歌を作る。

奈呉の海人たちが釣りをする舟は、今こんな時こそ舟の棚板を威勢よくたたいて、無理してでも漕ぎ出してあげたいのに。

なご うみ おき しらなみ  
奈呉の海の 沖つ白波

しくしくに 思ほえむかも 立ち別れなば (大伴家持)

奈呉の海の沖に立つ白波のように、しきりに思い出されることでしょう。旅立ってお別れしてしまったならば。

あゆのかぜ こし くにはと ことば ひがしかぜ  
東風 越の俗の語に東風をあゆのかぜといふ、いたく吹くらし

なご あま つり をぶね こ かく み  
奈呉の海人の 釣する小舟 漕ぎ隠る見ゆ (大伴家持)

あゆの風が越の方言で、東風を「あゆのかぜ」と言うが激しく吹いているらしい。

奈呉の海人たちの釣りをする小さな舟が漕ぎ進むのが、高波のあいだから見え隠れしている。

みなとかぜ さむ ふ  
水門風 寒く吹くらし

なご え つま よ かつ たづ な  
奈呉の江に 夫婦呼びかはし 鶴さはに鳴く (大伴家持)

河口の風が寒々と吹いているらしい。奈呉の江で、夫婦で呼び合いながら、鶴がたくさん鳴いている。

なご うみ か おき い  
奈呉の海に 舟しまし貸せ 沖に出でて

なみ た く み かへ こ  
波立ち来やと 見て帰り来む (田辺福麻呂)

奈呉の海に出るのに、舟をしばらくの間貸してください。沖に出て、波が立って来ないかと見て帰って来ましょう。

波立てば 奈呉の浦廻に 寄る貝の

間なき恋にそ 年は経にける (田辺福麻呂)

(前述)

なご うみ しほ ひ  
奈呉の海に 潮のはや干ば

あさりしに 出でむと鶴は 今そ鳴くなる (田辺福麻呂)

奈呉の海に潮が引いたらすぐに餌を求めに出ようと、鶴は今鳴いています。

……南風吹き 雪消溢りて 射水河 流る水沫の 寄るへなみ 左夫流そ

の児に 紐の緒の いつがりあひて にはほ鳥の 二人並び居 奈呉の海の

奥を深めて きどはせる 君が心の すべもすべなき (大伴家持)

……南風が吹いて雪解け水が溢れ、射水河の流れに浮かぶ水泡のように、投げ所もなく、左夫流という名の女に、(ひものをの)くつつき合せて、(にほどりの)ふたり並んで、(なごのうみの)心の奥底までも迷っている君の心の、なんともどうしようもないことよ。

……射水河 雪消溢りて 行く水の いや増しにのみ 鶴が鳴く 奈呉江

の管の ねもころに 思ひ結ばれ 嘆きつつ 我が待つ君が 事終はり 帰

り罷りて…… (大伴家持)

……射水河の雪解け水が溢れて流れ行くように、恋しさはますますつもるばかりで、鶴が鳴く奈呉江の管の根のように、ねんごろに思い悩み、嘆きつつ待っていた君が、務めを終えて帰って来られて……

……奈呉の海人の 潜き取るといふ 白玉の 見が欲し御面 直向かひ

見む時までは 松柏の 栄えいまさね 貴き我が君 (大伴家持)

……奈呉の海人が潜って採るといふ真珠のように、見たいと思うお顔を、目の当たりに見る時までは、(まつかへ)のお変わりなく元気でいらしてください。大切なお母様。

あゆをいたみ 奈呉の浦廻に 寄する波

いや千重しきに 恋ひわたるかも (大伴家持)

(前述)

「奈呉」は当時の国庁のあった伏木の台地から眺めることのできる海だったと考えら

れます。最初に挙げた「奈呉の海人の釣する舟は」は秦八千島という人の歌ですが、この歌の次に説明文がついています。「右、館の客屋に居つつ蒼海を望み、よりにて主人この歌を作る」、要するに八千島という人の家で宴会があった時に、客間から海が眺められたので歌を詠みましたというわけです。当時の役人は全員、現在でいう伏木の台地に住んでいたと思われまので、その八千島が住んでいた家からは海を眺めることができたのです。その次の歌もこの八千島の館で詠まれた家持の歌なので、家持もやはり目の前に広がる海を見ているというのがわかります。

田辺福麻呂の3首は家持の館で行われた宴会の歌です。これを詠んだ時、田辺福麻呂はまだ「奈呉」へ出かけていません。家持の館で歓迎会をしている時に「奈呉」と言っているわけですから、家持の館からも海が見えたのでしょう。現在は伏木の町も建物がたくさんあるので、なかなか海をそのまま見ることが出来ませんが、ある程度の高さ、つまり家持や八千島の館があったりしたような高さに上がれば、今のようにビルや工場が広がっていても、うっすらと海が見えるのです。家持は館から目の前に広がる海というものを眺めることができたので、たくさん「奈呉」の歌ができた、そして非常に身近な海として意識されていたのだらうというのがわかります。

その次の歌は非常に珍しく「奈呉の海の奥（おき）を深めて」というように、枕詞として「奈呉の海」を使っています。海の沖（おき）と奥（おく）という意味との掛け言葉の枕詞です。地名を枕詞に使うというのは、非常に身近にある場所だからできるわけです。越中万葉の中で、海、つまり富山湾は、今の伏木から旧新湊、今の射水市辺りの海岸線に広がる「奈呉」という海が1番詠まれています。実際には富山湾は氷見市から朝日町まで広い海が広がっているのに、『万葉集』で詠まれている海の歌のほとんどは、この「奈呉の海」なのです。

### (3) 氷見市の「海」

をどめ 娘<sup>ら</sup>が 夢<sup>に</sup>告<sup>ぐ</sup>らく 汝<sup>が</sup>恋<sup>ふる</sup>る その秀<sup>つ</sup>鷹<sup>は</sup> 麻<sup>ま</sup>都<sup>つ</sup>太<sup>だ</sup>要<sup>え</sup>の 浜<sup>は</sup>行<sup>ゆ</sup>き  
暮<sup>ら</sup>し つな<sup>し</sup>捕<sup>と</sup>る 氷<sup>ひ</sup>見<sup>み</sup>の江<sup>え</sup>過<sup>ぎ</sup>て 多<sup>た</sup>胡<sup>こ</sup>の島<sup>しま</sup> 飛<sup>と</sup>びたも<sup>と</sup>ほり 葦<sup>あし</sup>鴨<sup>がも</sup>の  
集<sup>すだ</sup>く旧<sup>ふるえ</sup>江<sup>え</sup>に 一<sup>を</sup>昨<sup>とつひ</sup>日も 昨<sup>きのふ</sup>日もありつ 近<sup>ちか</sup>くあ<sup>ら</sup>ば いま二<sup>ふつか</sup>日<sup>だ</sup>み 遠<sup>とほ</sup>くあ  
らば 七<sup>なぬか</sup>日<sup>か</sup>のをち<sup>は</sup> 過<sup>す</sup>ぎめ<sup>や</sup>も 来<sup>き</sup>なむわ<sup>が</sup>背<sup>せ</sup>子<sup>こ</sup> ねも<sup>こ</sup>ろに な<sup>こ</sup>恋<sup>ひ</sup>そ  
よとそ いまに<sup>つ</sup>告<sup>つ</sup>げつる (大伴家持)

……少女が夢にあらわれて、こう告げてくれた。「あなたが待ちこがれるそのすぐれた鷹は、麻都太要の浜を一日中飛びつづけ、つなし漁をする氷見の江を通り過ぎて、多胡の島あたりをぐるぐる回り、葦鴨の群れている旧江に、一昨日も昨日もいました。早ければもう二日ほど、遅くとも七日以上にはなりますまい。きっと帰ってきますよ、あなた。そんなに胸いっぱい恋いこがれないでください」と、今あるがごとく、ありありと告げてくれた。

もの<sup>の</sup>ふ<sup>の</sup> や<sup>そ</sup>十<sup>と</sup>伴<sup>も</sup>の男<sup>を</sup>の 思<sup>おも</sup>ふどち 心<sup>こころ</sup>遣<sup>や</sup>らむと 馬<sup>うま</sup>並<sup>な</sup>めて うち<sup>く</sup>ち<sup>ぶ</sup>り<sup>の</sup>  
白<sup>しら</sup>波<sup>なみ</sup>の 荒<sup>あり</sup>磯<sup>そ</sup>に寄<sup>よ</sup>する 洪<sup>しづたに</sup>谿<sup>たに</sup>の 崎<sup>さき</sup>たも<sup>と</sup>ほり 麻<sup>ま</sup>都<sup>つ</sup>太<sup>だ</sup>要<sup>え</sup>の 長<sup>なが</sup>浜<sup>は</sup>過<sup>す</sup>  
ぎ<sup>て</sup> 宇<sup>う</sup>奈<sup>な</sup>比<sup>ひ</sup>河<sup>が</sup> 清<sup>きよ</sup>き瀬<sup>せ</sup>ごと<sup>に</sup> 鶺<sup>う</sup>鴒<sup>か</sup>立<sup>た</sup>ち か<sup>ゆ</sup>行<sup>き</sup>か<sup>く</sup>行<sup>き</sup> 見<sup>み</sup>つれ<sup>ども</sup>も  
そ<sup>こ</sup>も飽<sup>あ</sup>か<sup>に</sup>と 布<sup>ふ</sup>勢<sup>せ</sup>の海<sup>うみ</sup>に 舟<sup>ふね</sup>浮<sup>う</sup>け据<sup>す</sup>ゑて…… (大伴家持)

(ものふの) たくさんの官人たちが、親しい者同士で気晴らししようと、馬を連ねて、うちくちぶりの、白波が荒々しい磯に寄せる洪谿の崎の崎をぐるりとめぐり、麻都太要の長浜を通り過ぎて、宇奈比河の清らかな瀬ごとに鶺鴒を楽しん

だり、あちらこちらに行って、見てまわったけれど、それでも物足りない、布勢の海に舟を浮かべて、……

英遠の浦に 寄する白波  
いや増しに 立ちしき寄せ来 安由をいたみかも (大伴家持)

阿尾の浦にうち寄せる白波は、いよいよひどく立ちまさってしきりに寄せて来る。あゆの風が激しいからだろうか。

氷見方面の海も一応詠んでいるのですが、歌はこれだけしかありません。1つ目は「麻都太要の浜行き暮らしつなし捕る氷見の江過ぎて」と海が出てきます。「麻都太要の浜」というのは、現在の雨晴から島尾にかけての白い砂浜、高岡から氷見にかけての長い浜で「松田江の長浜」ともうたわれています。「つなし」は現在でいうとコハダ、コノシロといった魚ですが、この「つなし捕る氷見の江」というのが越中万葉の中では唯一、具体的な魚と地名が結びついた非常に珍しい例なのです。

次の歌にも海は「麻都太要の長浜」しか出てきません。他の「多祜の島」とか「旧江」とか「布勢の海」というのは、水海（湖）なので、本当の海ではありません。もう1つは、「英遠の浦に寄する白波」という歌です。切手の絵柄にもなった氷見の1つの代表的な光景である阿尾の半島の辺りを「英遠の浦」といいます。

珠洲の海に 朝開きして 漕ぎ来れば  
長浜の浦に 月照りにけり (大伴家持)

珠洲の海に朝早く舟を出して漕いで来ると、長浜の浦にはもう月が照り輝いていた。

実は「長浜の浦」というのが、家持の歌にもう1つ出てきます。珠洲の海を朝出発して、舟を漕いで行くと、月が出た夜には長浜の浦に着いた、という歌なのですが、これを万葉学者たちは「麻都太要の長浜」に結びつけるのです。珠洲は能登半島の突端です。普通、当時の手漕ぎの舟で、朝珠洲を出発して「麻都太要の長浜」という島尾や雨晴辺りまで1日で来られるわけではない、これは平安時代の辞書に能登郡に長濱という地名があるので、現在のちょうど七尾湾辺りのどこかで、これは氷見ではない、というのが最近の学問の成果です。この用例から「麻都太要の浜」を一応はずすとすると、実は氷見の海というのは「つなし捕る氷見の江」という珍しい表現はありますが、非常に少ないということになります。

### ★漁り火を詠む家持

鮪突くと 海人の燭せる いざり火の  
ほにか出ださむ わが下思を (大伴家持)

鮪突き漁で海人がともしている漁り火のように、表にはっきりと出してしまうか、わたしの胸のうちを。

もうひとつ、具体的な場所を書いていませんが、歌の素材としては珍しい漁師が魚を捕るために灯す《いざり火》、現在で言う漁り火を詠んだ歌があります。『万葉集』の中で漁り火を詠んでいるのはこれとあと1つか2つしかないで、非常に珍しい歌なのですが、何よりも重要なのは1番最初です。「鮪(しび)突く」、「しび」というのはマグロ、そのマグロを「突く」とうたっているのです。4516首全部調べても『万葉集』の中では、魚を捕ることを「釣る」か「取る」としか言わないのです。その中で、家持だけがマグロを「突く」とうたっている。これはそういう漁の仕方を知っていたとしか思えません。『古事記』であろうと、『日本書紀』であろうと当時の歴史書をどれだけ調べてもこんな

具体的な表現は出てこないのです。つまり家持だけが珍しく、魚の捕り方を具体的に詠んでいるのです。これがこの歌の特徴です。

富山湾で「マグロを突く」ということを見た家持が詠んだわけですが、具体的にどこの海かはわかりません。私の個人的な意見としては、「鮪突くと海人の燭せる」は現在の氷見方面のどこかの光景だと思っています。「奈呉の海人」は一切魚を書かないのに対して、氷見は「つなし捕る」と具体的に書いています。実は家持は氷見に頻繁に出かけています。身近には「奈呉」があったかもしれませんが、実体験、つまり直に見聞きしたのはむしろ「氷見」の方が多かったはずなのです。ですから「つなし捕る」も「鮪（しび）突く」も氷見の漁師たちの姿をうたったものであってほしいと思うわけです。

## 五 布勢の「水海」 — 家持いちばんのお気に入り —

氷見の海はたった3つしかないとしましたが、実は氷見にはもう1つの海が広がっていたのです。「布勢の水海」と言われる海、これは「水海」と書くように、淡水の湖のことです。これが今の氷見の市街地に広大に広がっていたわけです。この場所こそが、家持が5年間越中で暮らした中で一番良く出かけた場所で、たくさんの歌を残しています。正しい「布勢の水海（ふせのみずうみ）」では字余りをおこしてしまいますので、歌の中ではほとんど「布勢の海（ふせのうみ）」として出てきます。

単純に「うみ」と言えばこちらの方が、「奈呉」よりも歌数が多いのです。ただ、これは海ではなくて実際には水海（湖）ですから、富山湾として説明できません。ですからこれは一応除外しておく、あくまでも「奈呉」が1番、「氷見」が2番目にくる、それだけしか海を詠んでいません。

## 六 富山湾の海風「あゆの風」

富山湾を代表する「あゆの風」という海風も家持は記録を残してくれました。

(1) 天平19年(747年)4月30日 [現在の暦で6月16日] に詠んだ歌

いみづかは	きよ	かふち	い	た	た	み	あゆ	かせ
……射水河	清き河内に	出で立ち	て	わが立ち見れば	安由の風	いた		
くし吹けば	水門には	白波高み	夫婦呼ぶと	州鳥は騒く	葦刈ると			
あま	をぶね	いりえこ	かち	おとたか				
海人の小舟は	入江漕ぐ	梶の音高し						

射水河の清らかな川べりに出かけて行ってたたずんで見ると、あゆの風がひどく吹いて、河口は白波が荒いので、夫婦で呼び合って州鳥が鳴き騒いでいるし、葦を刈る海人の小舟は、入江を漕ぐ櫂の音も高く響かせている。

(2) 天平20年(748年)正月29日 [現在の暦で3月7日] に詠んだ歌

東風	越の俗の語に東風をあゆのかぜといふ	いたく吹くらし		
奈呉の海人の	釣する小舟	漕ぎ隠る見ゆ		
(前述)				

(3) 天平勝宝元年(749年)5月10日～11日 [現在の暦で6月上旬] に詠んだ歌

英遠の浦に	寄する白波			
いや増しに	立ちしき寄せ来	安由をいたみかも		
(前述)				



(4) 天平勝宝2年(750年)5月29日 [現在の暦で6月中旬] に詠んだ歌

あゆをいたみ 奈呉の浦廻に 寄する波  
いや千重しきに 恋ひわたるかも

(前述)

(2)の「東風(あゆのかぜ)いたく吹くらし」の歌、「東風」と書いた下に「越の俗の語に東風をあゆのかぜといふ」と注を入れています。これが「あゆの風」を有名にしました。家持を含めて都で暮らしていた人たちは、春に吹く東風のことを恐らく「こち」と言っていたのを、越中の人たちは「あゆのかぜ」という、これは珍しいということで注を入れたわけです。この歌が詠まれたのは正月29日、現在で言うと3月7日ですから、春先の風ということで間違いのないのですが、ここに4つ並べているのはすべて「あゆの風」の歌で、歌われた順番に並べてあります。

(2)で注がうたれる前、(1)「安由の風いたくし吹けば」で既に「あゆの風」が出てきますが、ここには注をうっていないのです。この歌は4月30日、現在の6月16日の歌です。それから有名な(2)があり、その後(3)5月10日か11日、現在の暦で6月上旬に詠んだ歌に「英遠の浦」の「安由」が出てきます。それからその後(4)5月29日、現在の暦で言うと6月の中旬頃の歌にも「あゆをいたみ」と出てきます。つまり、(2)の歌だけが春で、それ以外は全部夏の歌なのです。春の時だけあえて注をうっているわけです。これがあつたために、全国の人たちは「あゆの風」は春の風だと思ってしまうのですが、夏の花からの風も富山湾では「あゆの風」、「あいの風」、「あえの風」というのです。4例のうち3例が夏、しかも「いたく吹く」ものとうたわれていることから、本来は特定の季節に限られる風ではなくて、時に激しく吹く海からの風を「あゆの風」というのでしょう。春の風に特定したように考えられていますが、実際は家持自らが夏で3つ詠んでいます。それらには一切注をうっていないということは、本来はこちらだと家持も思っていたのでしょう。

この「あゆの風」というのが、富山湾を代表する風としてこの後、平安時代以降の色々な文献に出てきます。つまり富山を代表するものというとは実は「有磯海」などの歌枕よりも、まずこの「あゆの風」という言葉が前面に出てきます。これこそが富山を代表するものというふうに、平安時代以降ずっと信じられてきたのです。

## 七 歌枕「有磯海」の生成をめぐって

平安時代の終わり頃、堀河院という天皇の時代に、家持という歌人がもう1度クローズアップされます。奈良時代に家持が詠んだ歌は、実はここまで忘れ去られていたのですが、「多胡の浦」「鵜坂川」「磐勢野」「礪波の関」「奈呉の海」「越の海」というような『万葉集』で詠まれていた地名、歌枕が突然復活します。この時代の歌人たちが『万葉集』というものに注目して、地名を拾い上げて、越中の歌枕というのが定着するわけです。これらの歌枕は芭蕉が詠んだものにも、弟子の日記に出てきたものもありますが、全部この時代に復活します。その時代、再び家持という歌人と越中の歌が注目された時代に、「有磯海」という歌枕が作り出されました。

『万葉集』にうたわれた「ありそ」は越中に関わる用例を除くと、すべて「荒磯」と

いう字で書かれていました。『万葉集』はすべて漢字で書かれていたので、家持や人麻呂の時代の訓み方が、平安時代以降の人はわからなくなっています。自分たちの時代ごとの訓み方が決められて伝わり、正しく訓まれるようになったのは実は江戸時代まで下がるのです。それまで好き勝手に訓んでいるものがたくさんあったのですが、特にこの「荒磯」という字で書かれたものはすべて、「あらいそ」としか訓まれていません。しかし越中の歌では「ありそ」としか訓むことができない「安利蘇」という字があてられていました。つまり、『万葉集』をどれだけひも解いても「ありそ」という言葉は越中にしかないのです。

それから、平安時代以降の和歌にだけうたわれた「ありその海」の1番最初の例は、家持よりもさらに100年近く経ってからの『古今和歌集』です。そこで初めて「ありそうみ」という言葉がうたわれるようになりましたが、具体的な場所を示していない、越中とのまったく関わりのない単純に海とか磯の意味で「ありそうみ」と詠んでいました。

『万葉集』では「あらいそ」と詠まれるものが大半で、越中にしか「ありそ」がない。それと、「ありそうみ」というのがどこか具体的な場所でなくうたわれていたという、その2つを結び付けて「ありそ海」は越中だと、こじつけた人があらわれたのです。それが藤原範兼（ふじわらののりかぬ）で平安時代の終わりに『五代集歌枕』を書いた人です。この本で範兼は『万葉集』と『古今和歌集』以降の勅撰和歌集、合計5つの本から地名の詠まれた歌を全部あげて国別に分類し、しかも山なら山、海なら海、例えば能登の海、越中の海という形で分類するという非常に細かい作業をしたわけです。ここに越中の海の歌枕として4つ挙げているのですが、実際には間違えています。最初「くひのうみ」、それから「ふせのうみ」、「なごのうみ」、「ありそのうみ」の4つですが、「くひのうみ」は羽咋の海のこと、当時は越中になりますが、その後は能登になります。それから「ふせのうみ」は湖で海ではありません。それから「なごのうみ」、「ありそのうみ」と並べ、この4つを越中にある海の歌枕として挙げたのです。これが平安時代の終わりに作られます。その後鎌倉、室町、江戸時代にはたくさんの歌を詠む人が出てきますから、歌が増えていけば、用例も増えていき、歌枕はすべてこの範兼の本が基準となってしまうのです。この範兼が、海として4つ挙げて、これが越中の海であると書いた為にこれ以降、越中の海の歌枕はこの4つです、ということで固定してしまうのです。

「なごのうみ」は確かに越中なのですが、『五代集歌枕』であげた歌には越中ではない他の「なご」の歌も含まれます。どこの「なご」かわからないのですが、家持が越中で詠んだ巻とは違う巻の歌が入っています。「ありそのうみ」に関しては『万葉集』からは家持の「かからむとかねてしりせば」しか挙げておらず、後は平安時代以降の歌しかありません。このような形で並べてしまえば、もう歌枕「ありそうみ」はこの後定着してしまうのです。その1番古い例として「越の海のありその波もみせましものを」という歌を挙げたために、これ以降の人はすべて、「ありそうみ」はこの歌によって生まれたと考えるわけです。ではなぜ範兼は「ありそうみ」を越中の海としてしまったのか。

(1) 天平18年(746年)8月7日【現在の暦で8月31日】の家持の歌

馬並めて いざうち行かな  
渋谿の 清き磯に 寄する波見に

馬を並べて、さあ出かけようじゃないか。渋谿の清らかな磯辺に打ち寄せる波を見るために。

(2) 天平 18 年(746 年)9 月 25 日 [現在の暦で 10 月 18 日] の家持の歌

かからむと かねて知りせば  
越の海の 荒磯の波も 見せましものを  
(前述)

(3) 天平 19 年(747 年)3 月 30 日 [現在の暦で 5 月 17 日] の家持の歌(「二上山の賦」)

射水河 い行きめぐれる 玉くしげ 二上山は …(中略)… すめ神の  
裾廻の山の 渋谿の 崎の 荒磯に 朝なぎに 寄する白波 夕なぎに 満ち  
来る潮の ……

射水河がふもとをめぐって流れゆく(たまくしげ)二上山は、…(中略)…この神の住む山のふもとこの山の、渋谿の崎の荒磯に、朝なぎのときにうち寄せる白波や、夕なぎのときに満ちてくる潮のように、…

渋谿の 崎の 荒磯に 寄する波

いやしくしくに 古思ほゆ

渋谿の崎の荒磯にうち寄せる波のように、いよいよしきりに、遠い昔のことが偲ばれます。

玉くしげ 二上山に 鳴く鳥の

声の恋しき 時は来にけり

(たまくしげ)二上山鳴く鳥の声が恋しくてならない時が、とうとうやってきた。

「かからむとかねて知りせば」という歌、これには一切「ありその海」と出てこないのですが、その前に「馬並めていざうち行かな」という歌があります。これが「渋谿」という現在の雨晴海岸が出てくる最初の有名な歌です。『万葉集』を調べる限り、清らかなという表現は浜によく使われ、清き浜辺、清き浜などとうたうのですが、「清き磯」というのは、これとあともう 1 つしかない、非常に珍しい言い方なのです。おそらく家持はまだ見たことのない場所を単純に褒めるために「清き磯」と言ってしまったのです。これは越中に来た直後の、宴会、歓迎会の席での歌なので、実際にはまだ「渋谿」を見ていません。その翌年、同じ「渋谿」を詠むのですが、突然表現が変わります。「渋谿の崎の荒磯」となるのです。それから「白波の荒磯に寄する渋谿の崎」というように。つまり「渋谿」が全部荒々しい磯と結びついて出てくるのです。

『万葉集』の中で「荒磯(あらいそ)」というのがたくさんうたわれている中で、「ありそ」としか訓めないものが越中の歌に集中し、その大半が「渋谿のありそ」として出てくる。そのことに注目して、越中で詠まれた荒々しい磯の「ありそ」が「渋谿の崎」に片寄っていることに着目して、単に家持が「越の海」としかうたっていなかった海を、越中の海として具体的に捉えるようになったのです。つまり「ありそ」=「越の海のありそ」が「渋谿のありそ」に結び付けられて、範兼は越中の歌枕というように考えたのです。「ありそ」という言葉が「渋谿」にしか出てこないから「越の海のありそ」を見せたいという家持が詠んだのを、きっと「渋谿」に違いない、そういうふうと考えて範兼は越中の海の歌枕として「ありそみ」というのを作り出してしまいます。

この『五代集歌枕』という本が後々大きな影響を及ぼします。これを真似て鎌倉時代以降同じ様な本がたくさん生まれます。その1番最後に集大成されたのが、江戸時代、河合曾良が参考にした本なのです。江戸時代になるまで、この『五代集歌枕』による分類が大きな影響を及ぼしていった結果、本来あるはずもない「有磯海」というのを生み出してしまったわけです。それが『万葉集』の中では前後の歌からすると「有磯海」は「渋谿」を結びつけているとしか思えないので、「有磯海」という歌枕の場所は、「渋谿」つまり現在の雨晴であろうということになったわけです。



みなさんがまず思い浮かべる雨晴と言え、この海越しに見える立山の光景でしょう。この光景こそが富山湾を代表する光景だと誰しもが言うと思うのです。まさに日本を代表する景色に近い形として、近々もしかしたら世界を代表する光景になるかもしれません。しかし、家持には「渋谿」の歌がこれだけあるのですが、実は1つもこの光

景を詠んでいません。『万葉集』でどれだけ雨晴や奈呉をうたおうと、立山の歌ではないのです、海越しの立山という歌はどれだけ調べても、明治以降まで下がります。かと言って江戸時代以前にこの光景がなかったわけではないのです。でもうたわれない。なぜか。その理由は『万葉集』にないからなのです。歌枕というのは何か根拠になるものがない限り生み出されません。だから根拠がある場合には「有磯海」、「卯の花山」のように勝手に作り出されることもあるわけです。でも根拠がない限りそれは歌枕にはならない、ということは海越しの立山という歌が奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代ずっと明治に至るまで1首も詠まれなかった為に、これは歌枕にならなかったのです。そのきっかけは家持が一切これを歌にしなかったということが原因なのです。

なぜ家持は海越しの立山の光景をよまなかったのか、家持は奈良で生まれ育っています。海の無い県で育っているのです。つまり普段海を見慣れない人間にとればまず海の方に興味を持つはずです。だから「かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波を見せましものを」なのです。越中の何よりも、どんな光景よりも、死ぬとわかっていたら海を見せたかった、という家持の歌がこの兄弟の海に対する思いを象徴させていると思うのですが、家持の興味は海にしかなかった。詠んだ海は「奈呉」に集中していますが、「海」にこだわった、だから「渋谿のありそ」というように最後の最後まで歌になっているわけです。海越しの立山をひとつも詠んでいないのは、家持が奈良出身だったからというのが結論になります。